

先週私たちは、主の弟子たちを縛り上げ、エルサレムに引いて来るために、ダマスコへと向かったサウロ（後のパウロ）が、その道中で主イエスとお会いし、回心へと導かれたことを見ました。主に遣わされたアナニヤによって、再び目が見えるようになったサウロは、バプテスマを受け、聖霊に満たされることで、ダマスコにいるユダヤ人たちに、主イエスがキリストであると宣べ伝えるようになったのです。

そして、今日の23節が続くわけですが、そこに「多くの日数がたって後」とあります。「多くの日数」とはどれくらいの期間を指すのでしょうか？おそらく、それは三年であったと言われています。というのは、この間に、サウロがアラビヤに行っていたと考えられるからです。いずれにしても、もともと教会の迫害者であったサウロが、主の介入によって、今度は「主の御名を人々の前に運ぶ者」へと変えられたのですから、彼のことをユダヤ人たちが良く思うはずがありません。ですから、彼らはサウロを殺す相談をするのです。そして、彼がダマスコに来た時、そこから出られないように昼も夜も町の門を見張りました。

けれども、その陰謀が実行される前に、サウロはそのことを知るのでした。そこで彼の弟子たちが取った行動は、夜中に、かごを使って、町の城壁伝いにサウロをつり降ろすことでした。町の城壁ですから、それなりの高さであったと思います。しかも、何か物ではなく、人をつり降ろしたわけですから、危険なミッションだったと言えるでしょう。でも、それしかサウロが殺されることなく、町の外に逃れる道はありませんでした。感謝なことに、その計画は成功し、サウロは難を逃れ、エルサレムへと向かうのです。

でも、どうぞ考えて見て下さい。エルサレムと言え、教会を迫害するための権威をサウロに与えた大祭司や祭司長たち、つまり、主イエスを救い主と認めないユダヤ人たちが最も多くいた所です。ダマスコにも増してサウロが迫害される可能性が高いところでした。にも関わらず、彼はそこに向かうのです。その理由の一つが、26節に記されています。「サウロはエルサレムに着いて、弟子たちの仲間に入ろうと試みたが、みなは彼を弟子だとは信じないで、恐れていた」。

サウロがエルサレムに行った理由の一つ、それは弟子たちの仲間に入ることでした。この時、少なくとも三年はすでに経っていたわけですが、とはいえ、サウロを受け入れることが、弟子たちにとって容易ではなかったことは誰もがわかることだと思います。サウロの回心のニュースは、おそらくエルサレムにも伝わっていたことでしょう。でも、かつてサウロを通して行われた激しい迫害の経験者であった弟子たちにとって、それを事実として受け入れることは、非常に困難なことであったと思うのです。でも、主は、そこにバルナバ（慰めの子）を助け手として備えられます。

27節「ところが、バルナバは彼を引き受けて、使徒たちのところへ連れて行き、彼がダマスコへ行く途中で主を見た様子や、主が彼に向かって語られたこと、また彼がダマスコでイエスの御名を大胆に宣べた様子などを彼らに説明した」。バルナバが、どのようにしてこれらのことを知ったのか、ダマスコの兄弟たちから聞いたのか、それともサウロ本人から聞いたのか、そのあたりはわかりません。でも、彼の仲介によって、サウロは使徒たちに会うことができ、エルサレムで弟子たちと共にいて自由に出入りすることが許されるのです。

そして、サウロはそこでも主の御名を大胆に語ります。29節「そして、ギリシャ語を使うユダヤ人たちと語ったり、論じたりしていた。しかし、彼らはサウロを殺そうとねらっていた」。サウロは、タルソ生まれのユダヤ人ですから、ギリシャ語を自由に操ることができました。ですから、ここでもギリシャ語を使うユダヤ人たちと主イエスについて語り合っていたのです。それはちょうどステパノがリベルテンの会堂に属する人々と論じ合ったようなものだと思います。でも、どうでしょう？ステパノは、その後どうなりましたか？人々は彼を石で打ち殺したのです。同じように、サウロと論じ合っていたユダヤ人たちも、彼を殺そうとします。

ダマスコのユダヤ人たちといい、エルサレムのユダヤ人たちといい、なぜ彼らはサウロを殺そうとしたのですか？答えは簡単です。それはサウロが「ナザレのイエスは神の子、キリストである」と宣べ伝えたからです。でも、そのことはユダヤ人たちからすると、何が何でも認められないものでした。彼らこそ、主イエスを神への冒瀆罪に定めて、十字架にかけて殺した張本人であったからです。

以前は、サウロも彼らの仲間の一人でした。率先して「この道」を信じる者たちを迫害していたのです。ところが今は、その死んだはずの主イエスが三日目によみがえり、弟子たちに聖霊を注ぐことで、信じるすべての者たちを救う神のキリストであると、大胆に宣べ伝えていたわけですから、彼らにとってサウロほど邪魔な存在、また脅威的な存在はありませんでした。

では、その殺害の陰謀に対して、サウロはどう対処しましたか？ステパノのように、彼はそこで殉教の死を選びましたか？すでに見たように、ダマスコでは、彼は弟子たちによってその難を逃れます。そして、エルサレムでは、30 節にこう記されています。「兄弟たちはそれと知って、彼をカイザリヤに連れて下り、タルソへ送り出した」。この時も彼は難を逃れ、カイザリヤ、そして、彼の出身地であるタルソへと向かうのです。

このサウロの対応をどう思われますか？（弟子たちの対応といっても良いかも知れません）。彼はユダヤ人を恐れるゆえ、つまり、彼らの迫害を恐れたので、そこから逃げたのでしょうか？そう考えるのが一番わかりやすいと思います。でも、もしそうなら、なぜダマスコの後、エルサレムに向かったのですか？エルサレムこそ、「裏切り者」の彼を憎む者たちが多くいると考えるのが自然でしょう。そこに入り、弟子たちに会うだけでなく、そのユダヤ人たちと語り合うなら、自分のことがすぐに祭司長たちに知られることくらいは、容易に推測できたと思うのです。それでも彼はそこに入って行った。そして、主イエスのことを彼らに語ったのです。それでも、彼が人々と人々から受ける迫害を恐れたと思いますか？

サウロには「異邦人、王たち、イスラエルの子孫たちの前に、主の名を運ぶ」という主からの使命がありました。それゆえに、彼がエルサレムに行き、またその後、タルソに向かったのは、主イエスが、彼をご自分の選びの民のところへと遣わされたのです。主は、そのようにして弟子たちを用いて、ユダヤ人たちの陰謀からサウロを守られました。でもそれは、サウロのいのちを守るためというよりも、むしろ彼を通して、ご自分の名が人々の前に運ばれるためだったのです。

そして、そのことは、サウロのその後の伝道生涯を見たら明らかです。主の名のために、彼がどれだけ多くの苦しみを受けたか、彼を通してどれだけ多くの人が信仰をもつに至り、また主に似た者へと成長させられてきたかは、歴史が証明しています。彼の死後、すでに二千年が経ちましたが、今でも彼の影響は多大です。ただ、それは彼自身のすばらしさによるものではありません。主が彼を選ばれることがなければ、彼にこの上ない寛容を示すことがなければ、他のユダヤ人の指導者たち同様、彼もまた最後まで主を拒み、主に敵対する者として生涯を終えていたことでしょう。すばらしい方は、主イエスであって、主がどこまでもあわれみと恵みに富んだお方であるゆえに、サウロにしても、私たちにしても、主の使命に生きることができます。

31 節「こうして教会は、ユダヤ、ガリラヤ、サマリヤの全地にわたり築き上げられて平安を保ち、主を恐れかしこみ、聖霊に励まされて前進し続けたので、信者の数がふえて行った」。サウロがタルソへ行ったことと、この 31 節とは、直接的なつながりはないとみて良いと思います。でも、この手紙の著者ルカは、このようにまとめているのです。

ここには「信者の数がふえて行った」とありますが、原文では、「教会」のことを指していると思われまます。ですから、ユダヤ、ガリラヤ、サマリヤの全土にわたり築き上げられた教会は「増えた、増殖した」と。では、教会（信者の数）は、どのようにして増えたのか？そこには「平安を保ち」とありますから、成長する教会のうちには、主の平安があったことは間違いないでしょう。普通に考えて、平安のない教会（弟子たち）が質においても、数においても成長するのは考えがたいことです。

それ以外ははどうでしょう？「主を恐れかしこみ、聖霊に励まされて前進し続けたので」とあります。この「主への恐れ」とは、英語（ESV）では“in the fear of the Lord”と訳されています。教会（主の弟子たち）のうちには「主への恐れ」がありました。それが、教会をして成長した要因の一つであったというのです。いかがでしょうか？今日、あなたのうちには主への恐れがありますか？今の時代は、主への信仰がとてもカジュアルである人が多いと言われますが、あなたの信仰はいかがですか？

マタ 10:28 「からだを殺しても、たましいを殺せない人たちなどを恐れてはなりません。そんなものより、たましいもからだも、ともにゲヘナで滅ぼすことのできる方を恐れなさい」。主はこのようにおっしゃいましたが、あなたは主なる神様への正しい恐れをお持ちですか？それゆえに、神様の被造物を恐れるというところから自由にされていますか？主がこのように言われるのは、私たちには、人を恐れたり、この世の何かを恐れる現実があるからです。でも、人ではなく、主を恐れるなら、主があなたをケアして下さいます。

主を恐れる人の中には、主に対する愛はなく、ただ恐れから従っているのではないかと思われる方もいます。でも、それでは平安を持つことはないでしょう。そこに私たちは「聖霊に励まされて」ということの重要性を見るのです。この「励まされて」とは、「助ける」とか「慰める」という意味も含みます。つまり、主を恐れる者のうちには、主からの励まし、助け、慰めが与えられるのです。そして、それはこれまでも見てきたように、主が聖霊を通して主イエスをわからせて下さることによってです。

私たちのうちに「主イエスが神であられること」が本当にわかるなら、人に対する恐れではなく、主に対する正しい恐れが生じます。この方が、活ける者と死にたる者とをさばかれるお方であることを知って、私たちは主の前に義と認められることを心から願うようになるはずです。ところが、罪ある私たちには、主の前に自分で完全な者となることはできないゆえに、自分のうちにその望みをもつことができません。そこに聖霊によって主の十字架の意味がはっきりと示されるのです。主からの慰め、励ましを受け取るのは、そこです。

私たちはみな罪人ゆえに、主のさばきを恐れなくてはいけない存在です。でも、主イエスは、そんな私たちを救うために、神のあり方を捨てて、人となってこの世に来て下さいました。そして、私たちのための罪の代価となられることで、自ら十字架にかかり、私たちのための贖い、とりなしの死を成し遂げて下さったのです。そのようにして主に救いの望みを置く私たちが罪の赦しを受け、いのちを与えられることで、永遠に主と共に生きるためです。主は、そのようにして私たちを愛して下さい、これからも愛し続けて下さるのです。

ですから、その愛を受ける主の弟子たちが、主を恐れつつ、聖霊に励まされて歩むなら、そこではいつも主と主のすばらしさが証されるはずです。そして、主の名がそのようにして人々の前に運ばれるなら、そこでは救われる人も起こされるのです。そうでなければ、もはや救われる人はいないということになってしまいます。でも事実、終わりの日はまだ来ていないので、主の名を聞く必要のある人々は、まだいるのです。私たちにはそれが誰であるかはわかりません。だから証しないのではなく、だからこそ主を証し続けるのです。主を恐れこしみ、聖霊の励ましを受けることで、主の御名を人々の前に運ぼうではありませんか。